

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



HAREM PALADIN

ハーレムパレディン

小説 竹内けん 挿絵 浮月たく

第一章

武芸大会

006

第二章

果たし合い

058

第三章

昼下がりの情事

109

第四章

襲撃事件

145

第五章

女王登極

199

登場人物紹介

Characters



シェラザード

シルバーナ王国の王女さまで、『天馬騎士団』の団長も務める少女。少年のような活発な振る舞いをする。



オリビエ

シェラザードの側近。真面目な性格のクールビューティという言葉がピッタリな娘。弓の名手でもある。



ユーノ

『天馬騎士団』のナンバーズリー。豪快であけっぱろげな気質で、モーニングスターを扱う。



ゼクス

辺境の騎士団に所属する少年だったが、武芸大会で見せた実力を買われて『天馬騎士団』に誘われる。

城下に屋敷のある姫騎士たちは、ゼクスが入団する以前は帰宅することが多かったそうだが、最近ではゼクスとのお楽しみのために、詰所に泊まるのが当たり前になっていた。

しかしながら、シエラザードの護衛は天馬騎士団の任務である。王宮には専門のロイヤルガードがいるが、天馬騎士団から一人も人を出さないのでは、団の存在意義にかかわる。そこで毎夜、二人ないし三人は王宮に入り、シエラザードと寝食を共にしていた。

当然、夜伽番はゼクスとの乱交には参加できない。そして、昨晚、ユーノとオリビエの二人が、そのお役目だったのだ。

ちなみにお姫様の寝室に、野郎を入れるわけにはいかないということで、ゼクスにはこの仕事の当番はない。

「くう」

ユーノとオリビエは悔しそうに呻く。

「いや、一日位でそんなに餓えないでくださいよ」

呆れた声を出すゼクスに、女たちは必死の形相で訴える。

「一日が問題なのだ。昨日、あたしたちがどれだけ悶々とした夜を過ごしたと思っている」「そうよ。わたくしたちが真面目に仕事しているときに、みんなはゼクスと楽しく過ごしていると思うと切なくて切なくて……」

鼻先に見える逸物を前に、女たちは訴える。

ここまで求められると悪い気はしない。ほだされたゼクスは二人の頭から手を離れた。

すると二人は、再び餓えた犬のように逸物にしゃぶりつく。これが天馬騎士団の誇る猛女と才女か、と目を疑うような浅ましい光景である。

「はあ、まったく二人ともなんでこんなに淫乱なんですかね」

溜息混じりの一言に、オリビエはカチンと来たようだ。逸物を横啜えにしながらもきつい眼差しで睨みあげる。

「なにを言う。おまえが無理やりわたくしにこの味を教え込んだのだぞ」

「それはまあ……そうですけど……」

それを言われると返す言葉がない。ゼクスが片手で顔を覆うと、ユーノが追い打ちをしてきた。

「そうそう♪ あたしだって、ゼクスと知りあうまで、自分がここまで好き者だとは知らなかったわ。たぶん、みんなだって同じよ」

ユーノは肩をすくめながら総評したが、オリビエが食ってかかった。

「なに常識人ぶっているのよ。あなたの悪い病気が、団内に伝染したんでしょ！」

「あたしは強要してないわよ。ただみんなもゼクスがiiiって言うからさ。ならみんなで楽しもうってことになっただけよ♪」

「強要したでしょ！ わたくしには！」

黒髪を振り乱して食ってかかる幼馴染に、ユーノはそっぽを向く。

「小うるさいあんたでも、男の味を教えてやれば少しは大人しくなると思ったのよ。まさ

かあんたまでゼクスに溺れるとは思わなかったわ。ゼクスはあんたの自慢のあのスカしたお兄様とは、まったく違うタイプじゃん」

「違うからいいのよ！ 知性やエレガントさではお兄さまに勝る方はいませんわ。でも、男らしい男であるゼクスに貫かれたとき、わたくしは芯から自分が女だつて実感したのよ」
兄に特別の思い入れのあるらしいオリビィエに、ユーノは半眼で突っ込む。

「うわ、身体から惚れるなんて下品な女……」

「あんたにだけは下品だなんて言われたくありません！」

逸物を挟んで喧嘩を始めた二人に、ゼクスはウンザリしながらとりなす。

「はいはい。喧嘩しない。どうせ悪いのはおれですよ」

逸物を握りしめたままユーノとオリビィエは真顔で頷きあつた。

「たしかにそうだ。おまえが悪い」

ユーノの評価に、オリビィエも追従する。

「まさに女の敵ですわね。この節操なしのやりちん男」

ことゼクスに悪口を言うときだけは投合するらしい。しかし、なんとこのしられようとゼクスとしては反論できる立場にはない。

天馬騎士団の姫騎士たち全員と同時に付き合うという現状は非難されてしかるべきと十分に自覚しているのだ。彼女たちの罵声は従容として受け入れる。

それにユーノ、オリビィエの勢いに辟易しているように演じているゼクスだが、別に二

人に求められて嫌なわけではない。ただ彼女たちが対抗心をあらわにあまりにもアケスケに張り合っているものだから、少し引いているというか、引いた演技をしているのだ。

ののしり合いながらも、二人の手は休まずに肉幹を扱しじきあげる。そのうえで二枚の熱い舌が、亀頭部を入念に舐めまわす。

左右に張った肉鰓えらを這いまわるのはもちろん、鈴割れ部分ほじを穿る。

「くう……」

思わずゼクスは呻き声をあげ、下腹部に力を入れて耐えた。

（ふ、二人に限ったことじゃないけど。どんどん上手くなるな）

ユーノもオリビエも、癖は強いが、十分に美少女という枠組みに入る女たちだ。

その上、世間というよりも、貴族の若様たちが、いずれは自分のお嫁さんになりたいと考えるだろう名家の子女たちである。それが自分との関係に溺れて、どんどん淫乱娘になっていく。

そのことが実感できるのは、なんともいえない優越感がある。

一カ月前、天馬騎士団に来る前のゼクスであつたなら、このような光景を想像しただけで果ててしまっただろう。

しかし、初体験してからというもの、毎夜毎夜、幾多の乙女たちとの乱交に興じているのだ。

いまさらダブルフェラ程度ですぐに果ててしまうほどにヤワな逸物ではない。とはいえ、

いくら経験を積んだとはいえ、若さだけはいかんともしがたく、先走りの液がトクトクと溢れてしまう。

「うふふ……」

ビクビクと痙攣しながら、トロトロの液体を垂れ流し始めたことに気づいたユーノとオリビイエは意味ありげに微笑する。

そして、二人の責めが変化した。

ジュブ……ジュル！……プチュプチュクチュ……ジュルジュル……。

交互に尿道口に口をつけて、先走りの液を夢中になつて啜り飲み始めたのだ。

女たちの熱い口唇が、暴力的といつていい技で男を追い詰める。

「はあん、ふんむ、うちゅちゅ……」

女たちもまた、男の液を飲むことによってさらなる興奮に誘われるらしく、頬を火照らせ、全身から淫ら汗を噴き出させながら、引き締まったお尻をくねくねと切なげに躍らせた。

追い詰める女たちと、追い詰められる男。男女の我慢合戦は辛うじてゼクスの勝利となつたようだ。やがてたまらないといった表情のユーノが逸物から顔をあげて懇願してきた。「ああ、ゼクス。あたし、もうたまらない。そろそろ、いつもみたいにブシャツとかけなくんない」

「せ、精液、ぶっかけるならわたくしにお願いするわ」

ユーノに続いて逸物から顔を離したオリビイエも、もはやとろけきった表情だ。

ゼクスがチラリと見ると、二人とも自らの股間に手を添えてオナニーしてしまっていた。ズボンの股間部分からは、失禁でもしてしまったかのような恥ずかしい沁みが広がっている。

精液をぶっかけられたい、というよりも、いまずぐ挿入されたいという気分なのだろうが、そこまで素直に口にできないあたりが、なんだかんだいって名門貴族の令嬢たちの見栄なのだろうか。

「そうだなあ……」

発情しきっている牝猫たちを前に、ゼクスはポリポリと頬を掻いた。

じつは淫ら猫たちの餓えた責めを受けて、逸物はビクンビクン痙攣して爆発寸前なのだが、意図的に余裕を演出してみたのだ。

女たちは焦らされれば焦らされるほどに、あとでの反応が劇的によくなる。そのことを経験則で知ってしまったゼクスとしては、彼女たちを思いっきり焦らしぬきたいという思惑がある。

「それじゃ、今日はまずお二人のおっぱいに出したいかな」

ゼクスの提案に、ユーノが顔を輝かせる。

「よし、パイズリか任せておけ」

オレンジ色の鬘をした女戦士は不急ぎで胸鎧を外した。

バインツ！ という効果音が聞こえてきそうな勢いで、双球が飛び出す。

男勝りのユーノだが、ひそかに騎士団随一の巨乳の持ち主である。そのうえ騎士団随一の女戦士らしく、引き締まった体躯をしている。つまり、騎士団随一のナイスバディである。

「うふふん、男って結局、最後はおっぱいなよね♪」

鼻で笑ったユーノはライバルに流し目をくれると、見せつけるように自らの両の乳房を手にとった。そして、持ち上げると、自らの乳首に軽く接吻してみせる。

「くっ」

その巨乳女だけができる荒技を目の当たりにして、思わずオリビエは後ずさる。

そんな同僚に優越感に満ちた表情を見せたユーノは、立派な骨格に支えられた健康的な巨乳の谷間に、いきり立つ逸物を挟んだ。

「あう……」

重厚感たっぷりの乳肉に包まれてゼクスは、思わず感嘆の溜息を漏らしてしまった。

男の反応に、ユーノは気をよくする。

「ほらほら、あたしの胸でいっちゃいなさい」

ムニムニムニムニ……

大きくて弾力のある乳房である。単に大きいだけではなくて、中にお肉がたっぷりと詰まっていると感じさせる乳肉だ。

それによって逸物を揉みしだかれる快感に、ゼクスは否応なく追い詰められて恍惚となる。しかし、陥落寸前のところで思いとどまっていま一人の牝猫に目を向ける。

「ほら、ぼさつとしてないでオリビエもお願います」

ゼクスが促すと、知的美人は悔しそうに自らの胸元を隠した。

「でも、わたくしはその……」

どうやら、ユーノの乳房の大きさに圧倒されてしまっているらしい。

鬼の副団長らしくない弱弱しさに、ゼクスは苦笑する。

「あの勘違いしないでください。ぼくはユーノの大きいおっぱいはもちろん好きだけど、オリビエのおっぱいも嫌いじゃないっていうか。おっぱいに貴賤なし、大きいのも小さいのもみんな好きですから。お二人にパイズリしてもらいたいんです」

ゼクスの宣言に、オリビエは目を丸くし、ついで呆れたと言いたげに苦笑を浮かべる。

「それって単に自分がドスケベだって宣言したようなものよ」

「もちろん、おれはドスケベですよ。じゃなくては、ドスケベなみなさんと付きあつていられませんか」

「さりげなく原因と結果を逆にしないでもらいたいわね。ゼクスがわたくしたちをドスケベにしているのよ」

頬を膨らませて怒ったふりをしたオリビエは、結局、自らブラウスの前ボタンを外すと、ブラジャーを取った。

プルン。

外界に出た乳房は、ユーノに比べるべくもなく小さいが形よく整っていて、犀利さいりな美貌のオリビィエにはよく似合っている。

オリビィエに限らないが、胸の小さな女性はコンプレックスを感じているようだが、貧乳には貧乳のよさがあるわけで、ゼクスには巨乳と同じく魅惑的に感じた。

「オリビィエさん、早くお願いしますよ」

ゼクスは左手を伸ばすと、オリビィエの小さな左乳首を摘んだ。

「あんゝ まったく、スケベなんだから」

文句を言いながらもオリビィエもまた、ユーノと並んで自らの双乳を近づけてきた。

ユーノは素直に半分場所を譲ってやる。

「あたしはスケベなところも含めてゼクスが好きだけどねゝゝ」

「わたくしだってそうよ。いまさら普通の男で満足する自信がないわ」

頬にかかる黒髪をわずらわしげに掻き寄せたオリビィエは、ユーノに負けじとその小さい胸を押し付けてきた。

ゼクスが見下ろす中、右からユーノの巨乳。左からオリビィエの美乳が、すっぽりと男根を覆った。

「おおお……」

女たちの柔らかい、それでいて張りのある肉塊に包まれた牡は、たまらず歓喜の悲鳴を

張りあげた。

合計四つの肉塊の感触が気持ちいいのはもちろんだが、パイザリの醍醐味は、女性の象徴である乳房に、逸物を挟んでもらっているという視覚的效果であろう。

王女さま直属の騎士団の二大幹部。生まれからいったらゼクスとは比ベモノにならない高貴な二人が協力して、自分の性器を挟んでくれているのだ。その精神的な効果で快感がいや増す。

ビクンビクンビクン！

表面はしつとりと冷たいのに、中は熱い肉に包まれて、男根は浅ましく跳ねた。先走りの液もいつそう溢れだし、女たちの柔肌を汚す。

「ああ、すごいゼクスのおちんちん熱いよ」

「ええ、火傷しそう……」

男性器の熱に焙られた女たちは、たまらないといった表情で身悶える。

発情した牝猫たちは、身体を上下に動かす。二人は期せずして、互いの乳首を押しつけ合い擦りつけている。

女たちの柔肌から噴き出す玉のような汗と、先走りの液とが混じりあって流れる。

「あ、あん……ふう……」

半開きとなった女たちの口元から熱い吐息が噴き出し、亀頭部に浴びせられる。

「くっ」

ゼクスは呻き声をあげながらもなんとか耐える。

「くっくくくっ、ゼクスつてばいい表情♪」

「たしかにゼクスが射精を我慢しているときの表情というのは、たまらなくセクシーだな」
ユーノとオリビエは満足そうに頷きあう。

「では、そろそろ出してもらおうか」

「わたくしは、ゼクスが耐えているときの表情も好きだけど、出しているときが一番好きなのよね」

男を追い詰めるという一点で意気投合した二人は、舌を伸ばし、まるで母猫が子猫のお尻を舐めて排泄を促すかのように優しく亀頭を舐めほじる。

「はぐっ……!!」

乳房の上下運動が一気に激しくなった。コリコリにしこり勃った乳首が、いきりたつ男根のカロの裏側を擦りあげてきた。

ゼクスが日々女の扱いに長けていくのに比例して、女たちも床上手になっていく。

これではまるでいたちごっこだ。

そして、女たちの淫戯の前に、男はついに屈した。

「でるうううう!!!」

雄叫びと同時に男根は爆発する。

どびゅっ! どぶっ! ブビュビュビュビュッ!!!



「わかりました」

ゼクスは、言われるがままに左足のニーソックスを巻き取ると、剥き出しになったその親指を口を含み、チューチューと吸った。

「あう……貴様、男のくせに女の足を舐めて屈辱感はないのか？」

「いえ、ありません」

「ふむ……そうなのか？ やはり、女王にはなってみるものだな。なかなか楽しい」

どうやらシエラザードは、男の顔面を踏んで、足を舐めさせるのは、女王さまの特権と思いつ込んでいるらしい。

（なんなんだろうなあ。この激しく偏った性知識は……）

純粹培養された拳句に、いろいろと変な知識が中途半端に融合しているらしい。

「では、次だ」

片足でバランスを取っているものなかなか疲れるのだろう。ほどほどのところでやめさせたシエラザードは、再びゼクスの顔面を踏ぐと、今度は腰覆いの中に両手をつまむ。そして、するするとショーツを下ろすと、右足、左足と交互に上げてショーツを脱ぎ捨てた。

ノーパンになった新女王は、そのまま腰を下ろす。

シエラザードは、まるで男の顔面に向かって用を足すように屈み込んだ。

いわゆる顔面騎乗というやつだ。

「……この間のように予の不浄なる場所をペロペロといっぱい舐めよ」

「了解しました」

ゼクスに否応はない。シエラザードの陰毛のない肉裂の左右に親指をあてがうと、ペラリと開いた。

姫貝はうつすらと潤んでいたが、まだ濡れているというほどではない。そこに口づけする。

「はうっ」

シエラザードはビクリと震えるが、そのまま耐える。

ゼクスはそのままペロペロ……と主君の陰唇の中を丁寧に舐め回す。

「はう……気持ちよい……ゼクスの舌は魔法の舌だな。ゼクスに舐められると身体が蕩ける」

どうやら、前回クンニされたことで、その気持ちよさに目覚めてしまったのだろう。

ゼクスとしても、シエラザードの陰唇を舐めるのはやぶさかではない。しっかりと麗しの新女王を満足させるべく、感じる部分を探り探り舐める。

「はう、はあ……いい。うむ……」

シエラザードは、膣口の性感はまだ発達していないようだ。逆にクリトリスは感じすぎてイヤらしい。いろいろ弄った結果、尿道口をほじるように舐めてやる程度の刺激がちょうどいいようである。

そこで集中的に尿道口を舐めた。

「はう……はん……んん……」

蹲踞ぞんきょの姿勢で耐えているのが辛くなってきたのか、下半身から足首にかけてがプルプルと痙攣けいれんしている。

恍惚としてきたシエラザードだが、不意に男の股間が盛り上がっていることに気づいた。男の顔に腰を落としたままいそいそと身体を反対向きにした女王さまは、危なっかしい手つきで腕を伸ばす。そして、いろいろ悪戦苦闘しながらズボンの中から逸物を取り出すことに成功した。

ビヨンっ！ と勢いよく逸物が飛び出す。

「はあう、ゼクスのおちんちんはいつ見てもかっこいいの」

惚れ惚れとした表情で逸物を見たシエラザードは、両手でしっかりと捕まえると、うつ伏せとなり、ぱくりと啜すすえてしまう。

「シエラさま！」

主君に奉仕させるなど恐れ多いと、ゼクスは慌てたが、シエラザードは離そうとはしない。

「ふむ……うむ……ジュル……プチュチュ……」

じつに美味しそうに逸物にしゃぶりついていたシエラザードが顔を上げた。

「はふ……大きくて顎が外れてしまいそうだ。しかし、ゼクスも予の恥ずかしいところを



舐めたのだ。予も舐める権利がある」

権高にそう言い捨てたシエラザードは再び逸物に吸いついた。

（まったく、負けず嫌いな性格だよな……）

苦笑を誘われながらゼクスもまた、シエラザードの陰唇に口づけをする。

「むっ……」

シエラザードは驚いたようだが、意地になって口奉仕を続けた。

女上位のシックスサインである。

男女は互いの陰部を夢中になって舐めあつた。

「プチュ、チュル、ジュルツ……チュー……チュー……ピチャ……」

女としての好奇心であろう。一生懸命に男を感じさせようと頑張っているのを感じる。亀頭を口に含ま尿道口に舌を入れて吸い上げていく技など、なかなか的確に男の急所を突いているのはたしかなのだが、やはり所詮は初めてのフェラチオである。

姫騎士たちの日々競いあい、切磋琢磨している技をかけられている逸物には、拙く感じられた。

しかしながら、やはり愛しい主君に奉仕されていると思えば、格別である。

少女の小さな口の中で、剛直がさらに大きくなり、ビクンビクンビクンと痙攣し始めた。

「シエラさま……も、もう……」

「うむ……」

男を追い詰められたと悟ったのだろう、シエラザードの口取りがさらに激しくなった。ゼクスも負けじと、目の前の麗しい陰唇を舐め回す。

「ふぐっ!!!」

シエラザードの腰がビクンと跳ねた。だいぶ快感に慣れてきたことを見て取ったゼクスは、満を持して包皮に包まれた陰核に吸いついたのだ。

「ふうっ! や、やめ、そこは……痺れるっ、あくう」

たまらずシエラザードは抗議したが、やめない。口に含んだ陰核の包皮を器用に剥いてやると、女王さまの肉真珠をぺろぺろと執拗に舐め転がした。

「はあああああ……」

強すぎる刺激に、シエラザードは腰を上げて逃げようとしたが、ゼクスは逃がさない。徹底的に急所責めをしてやる。

おかげで姫貝からはドブドブと透明な液体が溢れて、ゼクスの顔を汚した。

身悶えるシエラザードだが、両手で包む逸物がビクンビクンと跳ねていることにも気づいており、必死になって食らいついてくる。

（くっ、でるっ!!!）

女王さまの意地の責めに屈したゼクスもまた果ててしまった。

ドビュッドビュッドビュドビュ……ッ!!!

「うぐっ」

「ああ、シエラさま、そうやって上下させるよりも、前後に動かしたほうが、動きやすいでしょうし、気持ちよくなれると思いますよ」

「うむ、こうか……？」

シエラザードは素直に腰を前後に動かし始めた。

グチュウグチュウグチュウ……。

小柄な少女の体内に、巨大な逸物が躍りなんとも卑猥で粘着質な音がする。

「ほう、やはりゼクスのおちんちんはよい。大きくて、硬くて、ゴツゴツしていて、気持ちよい」

満足そうに目を細めながらも、自らの騎士の男根を自らの体内に馴染ませようと、必死の努力をしているシエラザードに、酷薄な声が聞こえてきた。

「シエラさま、楽しそうですね♪」

「っ！」

さすがにシエラザードは驚いたようで、ビクリと身体を震わせる。

女王の寝室にずけずけと入ってきたのはユーノとオリビエだ。二人とも祝典の会場からそのままやってきたらしく、騎士としての正装をしている。

「はう」

シエラザードはバツの悪そうな顔をする。

ベッドの上の惨状をしげしげと見た後、ユーノは蠟のようなオレンジ色の髪を掻き上げ

た。

「まあ、シエラさまもお年頃ですし、恋愛するなどは言いませんが、それ。あたしの男なんですけど？」

「む、ゼクスは予の騎士だぞ！」

シエラザードはまるで子供が秘密にしていた玩具を親に見つかり、「離すものか」とだをこねるかのように、ゼクスを捕まえて隠そうとする。

「知っております。でも、男女の間と、主従関係はまた別ものです」

オリビエは歩み寄り、ベッドの端に腰を下ろす。

「そいつはすでに天馬騎士団全員の恋人つてことになってるんです。いくらシエラさまといえども、そうやって独占するのは許されないのですよ」

ニヤニヤと笑みを浮かべたユーノも、ベッドに寄るとシエラザードの背後に回り衣装を脱がしにかかる。

「な、なにをする！」

異性に裸を見られてもなんとも思わないシエラザードだが、さすがにセックスの最中を他人に見られるのははばかられるらしい。

必死に抵抗しようとするが、なにせ膣穴に剛直をぶち込まれた状態では思うように身体を動かせなかった。

しかも、反対側からはさらにオリビエまで手を伸ばしてくる。

「ゼクスは、天馬騎士団全員の恋人です。ですからその団長たるシエラさまが楽しまれるのは当然の権利です。ですが、どうせなら、みんなで楽しみましょう。二人つきりで楽しむよりも気持ちよくなれますよ」

「それにゼクスの野獣の如き性欲を一人で受け止めていたら、身体がもちませんよ」
ユーノに臙脂色のローブを脱がされたのに続いて、オリビィエに胸鎧を脱がされる。

「そうそう、翌日の公務に差し支えますわ。もともとわたくしは、すでにその剛直で身体を慣らされてしまいましたけど……こういうのをおちんちんの奴隷にされたというのでしようね」

オリビィエは恨みがましく、仰向けになっっているゼクスを睨む。

（その割には普段、ずいぶんと人使いの荒いことだと思えますが……）

ゼクスは内心でぼやく思いもないではないが、便利使いされるのも悪い気分ではない。

「まったく、天馬騎士団の全員を毒牙にかけただけでは飽き足らず、ついにはシエラさまにまで手を出すだなんて……なんという絶倫なのかしら」

ゼクスとしては返す言葉もない。

そうこうしているうちにシエラガードは万歳させられて内着を脱がされ、さらにブラジャーも取られた。

プルンつと、小柄な体軀からは思いのほかに大きな乳房が零れ出る。

「うふふ、シエラさまもお仲間に入れて差し上げますわ」

上半身裸になって騎乗位で繋がっているシエラザードの左右から、ユーノとオリビイエがそっと寄り添う。

「な、なにをするつもりじゃ、や、やめよ」

側近たちが見せる生々しい女の感情に、シエラザードはおびえて逃げようとするが、男根に貫かれている状態では逃げるに逃げられない。

それをいいことにユーノとオリビイエは、それぞれ左右からシエラザードの発育途中の乳房を手にとると、乳首に吸いついた。

「はうううううう!!!」

ビクンッ!

シエラザードは身を反らす。

「どお、ゼクスの超極太おちんちん咥え込んだ状態でこれやられると効くでしょ」

「シエラさまったら、こんなに乳首を硬くしちゃって。いつの間にかすっかり女になられていたんですね」

ユーノとオリビイエは、ペロリペロリと愛しい主君の乳首を舐めしゃぶる。

「ふあ、ああ……」

シエラザードは奥歯が合わさらないと言いたげに、情けない声を漏らす。すっかり呆けた表情を見せるシエラザードにユーノは微笑する。

「さらにオマケ♪」

ユーノの左手が下半身に降りていった。そして、男女の結合部をまさぐると、陰核を捏ね回したのである。

「ひいあ……!!」

まだオナニーすら満足に知らないシエラザードは強すぎる刺激に目を剥いて、涎を噴いた。

ざらざらの蜜壺が、キュンキュンキュンと狂ったように締めてくる。

性的にまだまだ未熟な女の子は、お姉さまたちの極悪テクニクを食らってイキっぱなしの状態になってしまっているのだろう。

（くうく、シエラさまのおま○この中で、妖精さんが悶絶しているな）

肉棒にはブシュブシュと熱い液体を浴びせられた上に、ざらざらの妖精の羽が、まるで狂ったように暴れているようだ。

普段は傲慢な少女が、身も世もなく悶絶している姿を見るのは楽しいが、これは少しやりすぎだろう。

このまま感じすぎたシエラザードが、セックスに苦手意識を持つてもつまらない。見かねたゼクスが助け舟を出してやる。

「ユーノ、オリビエエ、ちよつとシエラさまを虐めすぎ」

二人をたしなめたゼクスは両手を伸ばすと、それぞれの股間に指を入れた。

「はっ」



「ふぐっ」

年上の女二人はびくんつと震えて、ゼクスの指戯に身を任す。

ユーノもオリビイエも、ゼクスに散々にやられてきた女である。勝手知ったる女体。どこをどうすれば感じるかわかっているし、ゼクスに触れるとたちまちのうちに感じ始めるように、調教された肉体である。

ゼクスにたしなめられた二人は、ようやくシエラザードから手を離れた。

「はう、はわ、はわあ……」

お姉さまたちから解放されたシエラザードは精根尽きたといった風情でうつ伏せになる。そのシエラザードから逸物を引き抜いたゼクスは、丁寧にベッドに寝かせてやってから、ユーノとオリビイエを叱る。

「まったく、お二人とも主君に嫉妬してなんになるんですかつ!!」

ゼクスの剣幕に、ユーノとオリビイエは正座となる。

主君の愛液に濡れ輝く男根を横目に見ながら、ユーノは頬を指で掻きながら訴える。

「だってさ。ゼクス、このままシエラさまを籠絡して国王になろうとか馬鹿な夢見ないか心配だったんだよ……」

「そうよ。このままシエラさまとあなたが仲よくなっていったら、いずれそういう問題が持ち上がる」

二人に真面目に指摘されて、ゼクスは心底驚いた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円(税込)



魔界最強のプリンスがドレイ志願!!
『当方Mドレイ希望』



全国書店で
好評
発売中

不死の吸血姫がドSのご主人様を募集
しているようです
『小説：酒井／挿絵：いの子』

思春期なアダム3

二人泣きの子猫

『小説：さかき／挿絵：天海雪乃』

2010年
7月下旬
発売予定!!



「…藤田君は責任取るべき」

睦月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?



「愛するシクレット様のため、
死んでも構いますわー!」

クリス、悪魔堕ち!?



全国書店で
好評
発売中

借金お嬢クリス3

令嬢はいかにして
42兆円を返済したか?

『小説：筑摩十幸／挿絵：了藤誠仁』

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中!

- 仙聖学園戦姫ノブナガ! ①～③
- 拘束!帝都少女隊偵団 赤い謀略を撃て!
- BLANGEL 輪になって踊る悪魔の夜

- 借金お嬢クリス ①～②
- プリンセスリバーシ!! 交錯する美姫と魔姫
- 無敵の姫騎士がTMに目覚めたようです

- ビルクリムメイデン ①～②
- 呪詛喰らい部【カースイーター】
- 魔界少女ルルイエール

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

最新情報は公式サイトへ!

あとみっく文庫

検索

http://ktcom.jp/index2.htm

KTC - KILL TIME COMMUNICATION...

おかげ様で46期!

国内最大級のダウンロードショップ! ゲームのダウンロード販売はここからどうぞ!

ほしいものちょっとつかも...

会社概要 通販ご利用方法 広告掲載案内 お問い合わせ プライバシーポリシー

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

コミックアンリアル
コミックアンリアル
アンリアル
検索

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利! 来かねる場合がございます。お問い合わせください。場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!

最新情報満載!
最新情報満載!!
ゲーム化!
ゲーム化!!

Valkyrie

http://www.comic-alkyrie.com/

cranberry

http://www.cran-berry.com/

mille-feuille
ミルフィーユ

http://www.mille-feuille.jp/

**モバイル二次元
ドリーム**

http://www.2d-dream.jp/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!